

俳句の題材（II）

山口青邨

題材と言へば俳句ではすぐ季題といふことが問題になるが、考へ方によつてはこれはコンヴェンショナルなものになつてしまふ。私は季題は作文の題などとは違はなければならぬと思つてゐる。

新緑といふ季題がある、今、句會などでこの題が出たとすれば、勿論新緑といふ言葉を入れなければならない、作者は「新緑や、新緑や」と言つて苦吟するわけだが、これは本當ではないと思ふ。

作者がたまたま新緑の庭に出てゐる、非常に爽快である、さういふ状態に於てはじめて俳句を作ることに向かせられるか、或はこの爽快さを俳句に作りたいといふ衝動に驅られることによつて、自然に新緑といふ言葉が入つて来る——といふのが本當だと思ふ。

新緑といふ題を與へられて、新緑を頭において、そこから發展させてゆくのは逆である、どこまでも作意の動く動機の方を尊重したい、さうすれば季題といふものが作文の題のやうな固定した感じのものとはならないであらう。

それでは題詠といふことはどうなるかと言へば、題詠も悪くはない、新緑といふ題を與へられたなら、新緑といふものをよく眺めて、新緑といふものをほんたうに作りたいといふ衝動に驅られるまで成熟させることである、さうすれば題詠などで、とかく起り得る——季題が浮いて、季題だけがあつて心持がないとか、マンネリズムに陥るとか、模倣をするとか、さういふものがなくなると思ふ。どこまでも題が主でなく、雰圍氣、動機がその季節のものをつかむといふことになればよいと思ふ。さうして詠んだ句に自然に適切な季題が入つて来る——といふやうにありたいと思ふ。